希望の力

主任司祭　フランシスコ　山口　一彦

私の座右の書は『レ・ミゼラブル』です。何度読み返したか分かりません。登場人物が型にハマり過ぎている、人間関係があまりにも都合良く出来ていてリアリティに欠けているなど、様々な批判がありながらも、多くの読者を惹きつけて止まない魅力があります。ヨーロッパでは『第２の聖書』と讃えられているビクトル・ユゴーの傑作です。

主人公ジャン・バルジャンは貧しさの余り、ひと切れのパンを盗み、刑務所暮らしを始めますが、自由を求めて脱走を繰り返しては捕まります。１９年間にも及んだ刑期を終え、社会への復讐心を抱えたまま娑婆に出て来ます。しかし、聖人のようなミリエル司教との出会いによって、正しい道を歩み始めます。

一方、これも貧しさに窮した女性ファンチーヌは、まだ物心もつかない幼子コゼットを、旅先でたまたま出会った宿屋の主人テナルディエに預けてしまう。ところがテナルディエ夫妻はコゼットをうとましく思い、ボロを着せて一日中朝から晩までこき使う。母親の顔も愛情も知らないまま育ったコゼットは、クリスマス・イブの夜遅く、森の中の泉へ水を汲みに行かされた時、暗闇の中で初めてジャン・バルジャンと出会います。

この森の中でのシーンは有名ですが、その夜、テナルディエの宿で皆が寝静まった後、人知れず行われたささやかな光景を、ご紹介いたしましょう。

男（ジャン・バルジャン）が引き返そうとした時、暖炉に目がとまった。宿屋の暖炉にはよくあるやつで、こういう暖炉は火の入っている時でも、決まってごくわずかな火しかなく、見るからに寒々としているものである。今その暖炉に火はなく、灰さえもなかった。それなのに、その暖炉に男の注意を引きつけたものがあった。それは、可愛らしい形をした、大きさの不ぞろいな、二つの子ども靴だった。男は、クリスマスの日に、暖炉にはき物を置いて、親切な妖精が素敵な贈り物を持って来てくれるのを暗闇で待つ、あの美しく古い子どもの習わしを思い出した。テナルディエの二人の娘、エポニーヌとアゼルマも、この習わしを忘れるはずがなかった。それで二人とも、自分の靴を片方ずつ、暖炉に置いていたのだった。

男は身をかがめた。妖精、つまり母親は、もうやって来たとみえて、どちらの靴の中にも、真新しい素敵な１０スー銀貨が光っていた。男は身を起こして立ち去ろうとすると、少し離れた奥の方の火床の一番暗い所に、もう一つ何かがあるのに気がついた。よく見ると、片方の木靴だと分かった。半分壊れかけた、一番粗末な木でこしらえた惨めな木靴で、灰と乾いた泥にまみれていた。それがコゼットの木靴だった。コゼットは、いくらだまされても決して気を落とさない、子どもらしくいじらしい信頼から、彼女もまた、暖炉に自分の木靴を置いていたのである。失望しか味わったことのない子どもの心に宿る希望。それは気高く美しいものである。

その木靴には何も入っていなかった。見知らぬ男は、チョッキを探り、かがみ込んで、コゼットの木靴に一枚のルイ金貨を入れた。それから、忍び足で自分の部屋に帰った。（佐藤朔訳：新潮文庫『レ・ミゼラブル』第２巻 163 頁）

この物語は、何度も映画やミュージカルになっています。でも、上記の場面が描かれることは、まずありません。子ども向けの翻訳本『ああ無情』『ジャン・バルジャン物語』でも、省略されています。ドラマチックな展開が読者を魅了するストーリーの中では、つい見過ごされがちな一節ですが、私はここに、クリスマスの本質を感じます。

コゼットの粗末な木靴……それは、誰からも顧みられずに、うとまれ、虐げられ、寒さと暴力と空腹の中で、何の楽しみも愛情も知らずに生きている８歳の女の子が、それでも心の奥に灯しているかすかな希望の象徴です。この悲しい物語は、二百年ほど前のフランスが舞台ですが、同じような思いで暮らしている子どもたちは、現代の日本にもたくさんいることでしょう。子どもだけではありません。日本だけでもありません。あらゆる国の、あらゆる年齢の人々が、自分ではどうしようもない苦悩にひたすら耐えながら、小さな小さな希望を抱きしめて、このクリスマスを迎えていることでしょう。

ジャン・バルジャンが木靴に入れたルイ金貨……それは、粗末な飼い葉桶に入れられた幼子イエス様の姿です。同じような苦悩と孤独に耐えた男の手で、救いが運ばれて来たのです。コゼットが小さな胸に秘めていた希望が、救いを呼び寄せたのです。二人はこの後、お互いに支え合って生きていくことになります。

「希望とは、弱く小さな者たちが持つ力です」……今のパパ様、フランシスコ教皇様の言葉です。様々な試練に翻弄されながらも、「希望」が持つ「力」を信じたいものです。